

氏名（生年月日）	カミ ヤ ヨウ スケ 神谷悠介	(1983年9月6日)
学位の種類	博士（社会学）	
学位記番号	文博甲第91号	
学位授与の日付	2014年3月20日	
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項	
学位論文題目	ゲイカップルの親密性と生活に関する研究 —クィア家族研究と後期近代社会論の視座—	
論文審査委員	主査 山田 昌弘 副査 矢島 正見 釜野 さおり	(国立社会保障・人口問題研究所人口動向研究部第二室長)

内容の要旨及び審査の結果の要旨

1. 論文の目的

神谷氏は、博士前期課程入学以来、ゲイカップル、特に男性ゲイカップルの調査研究を行ってきた。神谷氏は、複数の査読論文があるほか、専門学会誌（『家族社会学研究』）の特集にも原稿を依頼されるなど、日本のクィア家族（性的マイノリティが形成する家族的関係）研究者として、名の知られた存在になっている。本論文は、彼の一連の調査研究の総まとめというべきものである。

本論文の目的は、第一に、同居するゲイカップルの関係性と生活のメカニズムについてインタビュー調査を通じて実証的に解明することにある。

分析に際しては、クィア家族研究の中心的視座である「セクシュアリティを加えてかき混ぜる」（デュン）と、「レズビアンやゲイのカップルの生活を社会経済的文脈に位置付ける」（キャリントン）という理論的視座に依拠している。また、後期近代社会論の理論的支柱であるアンソニー・ギデンズによる「純粋な関係性」概念に焦点を当て、再検討を試みている。「純粋な関係性」とは、互いに相手との結びつきを続けたいと思う十分な満足感が得られる限りにおいて継続される関係であり、対等な関係性のモデルとして提示される。これらの視座を用いてゲイカップルにおける親密性を基盤としたパートナー関係や、家計組織、消費者行動、家事労働といった生活のあり方を分析している。

第二の目的は、このような研究を通じて解明された親密性と生活についての理論的モデルを提示することにある。すなわちギデンズの議論に代表される〈親密性モデル〉と対比して本研究において依拠するデュンおよびキャリントンの理論的視座を〈親密性—生活の相互関係モデル〉として再構成することによって、親密性と生活を分析する際の新たな理論的モデルの構築を目指している。

2. 論文の構成

序章 本稿の目的と構成

[1] 本稿の目的

[2] 本稿の構成

第1部 先行研究および方法論

第1章 先行研究——有効性と限界

1-1 後期近代社会論における同性愛者の関係性

1-2 婚姻を基盤としない多様な関係性を対象とした家族研究

第2章 本研究の理論的視座

2-1 クィア家族研究とは何か

2-2 クィア家族研究——デュン、キャリントンによる非異性愛者の家族研究

第3章 調査概要

3-1 インタビュー調査の有効性

3-2 調査期間と調査対象者

3-3 調査目的, 調査項目, 調査方法

3-4 調査対象者とそのパートナーの属性

3-5 倫理的配慮

第2部 ゲイカップルの親密性と生活

第4章 ゲイカップルの家計組織と, 親密なパートナー関係

4-1 レズビアン/ゲイのカップルにおける家計組織に関する先行研究

4-2 課題設定と分析の視点

4-3 家計組織の独立性

4-4 ゲイカップルの関係性に対する「純粋な関係性」概念の有効性

4-5 ゲイカップルの家計組織と親密なパートナー関係の考察

第5章 ゲイカップルの消費者行動

5-1 消費者行動に関する先行研究

5-2 消費者行動の独立性

5-3 家事労働は市場購入により外部化されるのか

5-4 ゲイカップルの消費者行動についての考察

——異性愛家族との相違性と共通性から

第6章 ゲイカップルの家事分担

6-1 家事の定義および分類

6-2 ゲイカップルの家事分担に関する先行研究

6-3 異性愛家族の家事分担に関する先行研究

6-4 異性愛家族を対象とした従来の家事分担理論の検討

6-5 ゲイカップルにおける家事分担の規定要因やメカニズムの考察

——パートナー間の家計組織の独立性と、カップル双方への仕事役割の期待に着目して

終章 結論

[1] 各章の小括

[2] クィア家族研究へのインプリケーション

[3] 後期近代社会論へのインプリケーション

[4] <親密性モデル>から<親密性—生活の相互関係モデル>へ

3. 各章の概要と評価

序章 本論文の目的と構成

本稿の目的は、第一に、インタビュー調査を通じてゲイカップルの関係性と生活のメカニズムについて実証的に解明すること、そして、第二に、このような研究を通じて解明された親密性と生活についての理論的モデル、すなわち、<親密性—生活の相互関係モデル>を提示することであることが示される。

第1章「先行研究——有効性と限界」

第1章では、本稿の研究テーマ全体を包括するフレームワークに関わる先行研究として、ギデنزの親密性に関する研究と、婚姻を基盤としない多様な関係性を対象とした家族研究が検討される。ギデنزの親密性に関する研究の限界として、純粋な関係性の実現において収入などの資源による差異が生じる可能性、および、婚姻に基づかず相対的に対等な関係性を築いてきた同性愛者の関係性の分析を通じて、純粋な関係性が浸透しつつある異性愛者の関係性の今後を予見するという方法の妥当性について検討している。

婚姻を基盤としない多様な関係性を対象とした家族研究については、レズビアンカップル研究、シェアハウジング研究、非法律婚カップル研究などを取り上げ、従来の異性愛法律婚カップル以外の生活形態分析をレビューし、家事分担や家計組織のメカニズムの理解に対して新たな視点を投げかけていることを論じている。

第2章「本研究の理論的視座」

第2章では、本研究が依拠する理論的視座および研究方法について論じている。まず、デュンのアプローチを取り上げた。そして、同性愛者の関係性を対象とすることによって、ゲイカップルと異性愛家族の双方に対して、職場生活と家庭生活の均衡が保たれる条件や、平等なパートナーシップが成立するための条件について示唆を与えることができることを論じた。次に、キャリントンのアプローチを取り上げ、①パートナーシップの分析に階層の視点を取り入れる、②職場生活のあり方が家庭生活に与える影響を解明する、③家事や生活のあり方の規定要因についての語りを社会構造と関連付けて分析する、という視点を本研究に関わる重要な論点として整理している。

1, 2章の先行研究の整理は妥当であると判断される。

第3章「調査概要」

第3章では、本研究で分析に用いるインタビュー調査の概要について述べている。すなわち、同性愛者における親密性を基盤としたパートナー関係や、家計組織、消費者行動、家事労働といった生活の相互関係について、インタビュー調査における半構造化された聞き取りを行うことによって、従来の量的調査において解明された知見とは異なる側面を解明することが可能になることを論じている。

調査方法、倫理的配慮とも妥当であると判断される。

第4章「ゲイカップルの家計組織と、親密なパートナー関係」

4章、5章、6章で、詳細なインタビュー調査に基づいた、ゲイカップルの生活実態の特徴を分析している。

4章では、3つの課題を設定している。第一に、ゲイカップルにおける家計組織の分析を行い、レズビアンカップルと比較した際のゲイカップルの家計組織の特徴を解明するという課題を設定した。ちなみに、家計組織とは家計の管理方法に焦点を当てるアプローチである。分析の結果、レズビアンカップルはそれぞれの収入を共同で管理する共同管理型が典型的な家計管理パターンの一つであるのに対して、ゲイカップルはそれぞれの収入を別々に管理する独立型が典型的パターンであることを解明している。

第二に、純粋な関係性の実現可能性における個人的資源による差異を検討し、家計組織パターンと、純粋な関係性の重要な要素である平等なパートナーシップとの関係を解明するという課題を設定した。分析の結果、関係性をつなぎとめる要因として親密性のみが働くパターン（好きだから同居する）と、親密性のみならず経済的インセンティブが働くパターン（生活費が浮くから同居する）が存在することから、純粋な関係性の実現可能性は収入などの個人的資源によって異なることが示唆された。したがって①純粋な関係性を平等なパートナーシップの指標とした場合、パートナー間の家計の独立性は平等なパートナーシップを保障するとは限らないこと、②家計組織のあり方だけでなく、収入などの資源が平等なパートナーシップの成立において重要な役割を果たすこと、が解明された。

第三に、同性愛者の関係性の分析を通じて異性愛者の関係性の今後を予見するというギデンズの方法の妥当性を検討し、同性愛者に対する差別がゲイカップルの家計組織や生活状況に与える影響を解明するという課題を設定した。分析の結果、次のことが明らかになった。婚姻や対等性など現在の同性愛者と今後の異性愛者双方の関係性に共通して働く要因に焦点を当てた場合、同性愛者の関係性から異性愛者の関係性を予見することができるかもしれない。しかし、差別や偏見など同性愛者の関係性に独自に働く要因に焦点を当てた場合、同性愛者の関係性を分析しても異性愛者の関係性の今後を予見することはできないことが示された。このような結果から、同性愛者に対する差別が、ゲイカップルにおける家計組織や生活状況に与える影響として、次のことが解明された。生活の個別性、すなわち、多くの異性愛者の夫婦間においては共有される収入や生活財が、ゲイカップルにおいてはパートナー間で個別に所有されるという知見が得られている。

第5章「ゲイカップルの消費者行動」

第5章では、第一に前章で明らかにした家計組織の独立性が消費者行動に対して与える影響について分析を行っている。消費者行動とは、生活を創造し維持するために消費者が行う活動を指す。分析の結果、ゲイカップルは家計組織の独立性のもとでそれぞれが独立した消費者行動を行っているため、パートナー間で収入格差がある場合に生活水準に格差が生じることが明らかにしている。

第二に、次章において家事分担の規定要因について解明する際に重要であるため、様々な消費者行動の中でも家事労働の外部化を取り上げ、ゲイカップルにおいて家事労働は市場購入を通じて外部化されるのか否かを検討した。分析の結果、労働時間が長く、収入の水準が比較的高い場合に、家事労働の多くが外部化されることが明らかになった。また、自炊することに価値が見出される場合や、他人が自宅に入ることに對して抵抗感が示される場合に、家事の外部化が進行しにくいことが確認されている。

第6章「ゲイカップルの家事分担」

第6章では、相対的資源説、時間利用可能性論、イデオロギー論や、「家族責任の遂行が愛情表現とみなされるメカニズム」といった、異性愛家族を対象とした従来の家事分担理論を取り上げた。そして、ゲイカップルの家事分担に対するこれらの理論の有効性を検証した。

検証の結果、従来の理論はゲイカップルに対して十分な有効性を持たないことが解明された。すなわち、相対的資源説、時間利用可能性論、イデオロギー論以外の要因として、家事方法へのこだわり、家事への選好、家事量の水準、家事能力に関わるということが明らかになった。また、家事・仕事の二重負担に対するパートナーの不満が受け入れられ、家事を平等に分担するようになることや、家事外部化によって家事量が減少するため、どちらか一方に大きな家事負担が生じないことから、「家族責任の遂行が愛情表現とみなされるメカニズム」がゲイカップルにおいて働いていないことを解明した。

以上、家計、消費、家事分担の分析を通して、ゲイカップルの特徴を分析したときに見えてくるものをまとめ、従来の理論が十分な有効性を持つかどうかについて考察を行っている。すなわち、従来の理論は家計の共同性の高いカップルを想定し、カップル双方に異なる役割が課されることを前提として構成されているため、①パートナー間の家計組織の独立性と、②カップル双方への仕事役割の期待によって特徴づけられているゲイカップルに対して十分な有効性を持たないと結論づけている。

本研究で注目すべきは、ゲイカップルは従来の性別役割分担意識からは解放されているが、「男は稼ぐべき」という男性性の規範からは解放されているとはいえない。この点をもう少し強調すれば、論文の完成度が高まったと判断される。

終章 結論

終章では、①パートナー間の家計組織の独立性、②カップル双方への仕事役割の期待が、ゲイカップルのライフスタイルを規定する主要な要因であることを論じた。そして、このような結果に基づき、クィア家族研究および後期近代社会論へのインプリケーションについて述べている。最後に、

本研究を通じて解明された関係性と生活についての理論的モデル、すなわち、＜親密性—生活の相互関係モデル＞が、従来の＜親密性モデル＞のオルタナティブとして提示されている。

4. 本論文の評価

本論文は、課題設定、先行研究の整理、仮説設定、調査実施方法、調査分析結果の解釈、結論の導き方など、よく吟味されている。視点、視座が明確であり、論文の構成も優れ、論理的に一貫している。用語の使用法、調査への倫理的配慮、引用など適切になされている。特に、ゲイカップルへのインタビュー調査は詳細になされており、調査データとして大変クオリティが高い。

学説的には、本論は、クィア家族研究と家族社会学研究の接合領域に属するものである。セクシュアリティ研究の中でも、デュンやキャリントンなどクィア家族研究の最新の理論が整理され、単に、ゲイという例外的事例を扱うとことではなく、ゲイなどマイノリティの生活実態を調査することにより、むしろ、マジョリティである異性愛カップルの生活実態分析を逆照射して分析するという点が大変評価される。

また、欧米の家族社会学者によってみられるゲイカップルの理想化、つまり、性別役割分業から逃れているが故に、愛情によってのみ結びついているという純粋な関係性が実現されているとする親密性モデルに対し、ゲイカップルにおいても、階層や資源などの生活状況によって親密性のあり方がどのように異なるのかを十分に解明することが困難であること、そして、同性愛者の関係性が異性愛者の関係性かという親密性パターンによって生活のあり方がどのように異なるのかを十分に解明することが困難であることを示したことは評価できる。

そして、本論文において、＜親密性—生活の相互関係モデル＞の定式化を試み、①特定の階層に限定されない親密性の分析、および、②差別や偏見など現代社会においてマイノリティの親密性に独自に働く要因を視点に入れながら、生活への影響の分析が可能になるとしている点も、評価される。このような理論的モデルに依拠することで、従来の＜親密性モデル＞の限界を超えることが可能性をもっている。

ただ、課題も散見されることも事実である。

本論文が依拠する調査は、日本国内で同居している男性ゲイカップルの調査に依拠している。ケース数は論文としては十分であるものの、より説得力を増すためには、ケース数の更なる増加が望まれる。また、日本では同居していないゲイカップルの方が多いと推定される。また、同居しても別れたケースも存在する。安定しているカップルだけでなく、なぜ、同居しないのか、なぜ同居したのか、なぜ別れたかといったカップルの生活の動態に関するデータがあれば、理論が強化されるであろう。

インタビューデータの解釈でも、一部、両義的に解釈できる箇所も存在している。また、女性同性愛者（いわゆるレズビアンカップル）との比較も十分とはいえない。

また、日本社会という視点も必要である。クィア家族研究は、偏見がより少なく、一部同性結婚

が認められている欧米で開発されたものである。また、男女平等が進んでいる欧米では、同性愛者でも家計や家事分担が平等化の方向にある。日本という特殊な条件の下でのカップルであることをどこまで一般化できるかという課題がみられる。

以上あげた問題点は、今後、研究を進める中で、解決されるべき課題というべきものであって、本論文の評価を低めるものではない。

最終試験は、2013年11月27日に行われ、試験終了後、審査委員会は一致して神谷悠介氏への学位授与を承認した。